

認知症 ポジティブ部 positive

「物とられた」に 怒らず叱らず

* 認知症になっても「ポジティブ」(＝前向き、積極的)に生きるヒントや取り組みをお届けします。

「物をとられた」と感じてしまうケース



記憶をうまく活用できないと...



「忘れた」自覚は難しく...



「まずは、認知症の人の不安な気持ちに寄り添ってほしい」と話す矢吹さん



部屋ですつとさがし物

お便りをくれた女性に連絡し、詳しい状況を教えてもらいました。

80代の父親が最近、部屋の中でずっと何かをさがしているそうです。例えば、現金やキャッシュカード。どうやら、なくさないように自分で引き出しなどにしまって、その場所を忘れていたのだ、とのこと。機嫌が悪いと、「お前が隠したんだろう」「困る姿を見て楽しんでるのか？」と言われるそうです。

「父には自宅で穏やかに、幸せに過ごしてほしいのですが……」と、女性はちょっと疲れている様子です。

ふだん、私たちは意識していませんが、記憶は、①目や耳などでキャッチした「見た物」「聞いた音」といった情報を脳が受け取る②脳内にその

それでは、いつした場合は、家族はどのように対応すればいいのでしょうか。「物をとられた」という訴えに、家族は、「誰も盗んで

「本人の話聞いて」

情報保管しておく必要な時に呼び出す」という段階で成り立っています。しかし、情報をしっかり保管できなくなったり、引き出せなくなったりすると、記憶をうまく活用できません。

一般的に、認知症の「もの忘れ」では、新しいことを覚えるのが難しくなります。引き出せる記憶がなければ、少し前に目の前で起きた出来事

でも、その人にとっては「なかったこと」と同じです。お便りのように、いつもさがし物をしてるケースについて、矢吹さんは「物がそこにあった記憶はあるが、それを自分で『しまった』『消費した』『捨てた』ことなどは覚えていない、という状況が起きている」と説明します。

「ここにあったはず」の財布や預金通帳、カギが突然、目の前から消えたら、誰でもあわてるはず。さがし続ける物は、「その人にとって」大切な物や愛着がある物であることも多いそうです。

思い込み 背景に不安

一緒に暮らす高齢の父が「物をとられた」と頻りに言うようになったら、どうしたらいいかわからない。そんな内容のお便りが届きました。家族に認知症の症状が目立ち始めた時、多く人は戸惑います。「接し方」のポイントを専門家に聞きました。(阿部明霞)

当事者や家族の支援に詳しい、高知県立大准教授で認知症介護研究・研修仙台センター特任研究員の矢吹知之さん(50)を訪ねました。矢吹さんは「実際には誰も物をとったり、隠したりして

いないのに、認知症の症状で『盗まれた』と思いついてしまっていることがあると思います。「記憶」の仕組みから説明してもらいました。

本人が自然に見つけられるようにしておく。「置き忘れていただけかな……」と感じられれば、不安の解消につながるかもしれません。

ただ、どのような方法で不安を解消できるかは人それぞれで、必ずうまくいく対応はないそうです。

その場をやり過ぎるため、「前からなかったよ」などとうそをついたり、適当に「まかした」は「信頼関係を崩してしまいかねないため、心情に配慮してそうせざるを得ない場合以外は避けたい」と矢吹さんはアドバイスします。

何かをさがし続けたり、同じことを何度も聞いたりするのは、「自分で何とかしよう」と頑張っている証拠。困っている、不安だというメッセージでもあります。「認知症の人の行動を変えようとするのではなく、周りの環境や対応を変えられるように、よく話を聞いてほしい」と訴えます。

矢吹さんは「背景にある不安」を取り除き、安心させられる対応が望ましい」と話します。大切なものは、否定も肯定もせず、「それは心配だね」などと気持ちに寄り添うことだといいます。

例えば、「なくなった」と言っていた物を家族が見つけた時に、「あるじゃない」と強く言うのではなく、さりげなく目に入る場所に置いて